

22. 分化型甲状腺癌術後症例に対する I-131 内用療法

——54 症例の治療経験——

西山 佳宏	中野 覚	合田真由美
余田みどり	川崎 幸子	高島 均
田邊 正忠		(香川医大・放)

分化型甲状腺癌術後 54 症例に I-131 内用療法を施行し, retrospective に検討した。対象は 1984 年 11 月から 1991 年 4 月までの 54 例で, 男性 9 例, 女性 45 例, 平均年齢 52.6 歳, 乳頭癌 47 例, 濾胞癌 7 例である。方法は当科のプロトコールによった。他検査で転移巣を認めたのは 30 例で, そのうち 16 例に I-131 の集積を認めた。I-131 が転移巣に集積を認めた群は, 認めなかった群よりも若年者と濾胞癌の割合が多く, サイログロブリン値は高値であった。CR 群と PR 群では年齢と組織型に差はなかったが, サイログロブリン値は PR 群が高値であった。副作用は食欲低下, 全身倦怠感, 吐気などが約半数に見られたが, 全て reversible であった。

23. 各種悪性腫瘍の肝転移例における PIIP, IV 型コラーゲン・7S の比較検討

阿多まり子	中村 誠治	赤宗 明久
藤井 宗	木村 良子	棚田 修二
飯尾 篤	濱本 研	(愛媛大・放)

PIIP と IV 型コラーゲン・7S のキットを用い, 基礎的検討と正常値の設定, および悪性腫瘍とその肝転移例の陽性率を比較した。基礎的検討では, 同時再現性・日差再現性・希釈試験ともに良好であった。最少検出濃度は, PIIP が 0.03 U/ml, IV 型が 2.0 ng/ml であった。Cut off 値は PIIP を 0.7 U/ml, IV 型は 6.0 ng/ml とした。悪性腫瘍とその肝転移例の比較は, PIIP は全体例と転移例ともに陽性率が高く, IV 型は転移例で陽性率が高かった。両キットの測定値の相関係数は 0.806 であった。

24. 金製剤による間質性肺炎の 1 例

——核医学的検討を中心に——

橋村 伸二	河野 良寛	新屋 晴孝
清水 光春	竹田 芳弘	平木 祥夫
		(岡山大・放)
水戸川剛秀	西谷 皓次	太田 善介
		(同・三内)
中村 哲哉	栗井佐知夫	荻野敬一郎
		(国立岡山病院・放)

症例は 56 歳, 男性。慢性関節リウマチ (RA) としてシオゾール総計 265 mg 投与を受けていた。RA による関節症状が比較的安定していた時期に, 労作時呼吸困難が出現し, 次第に増強。同時に全身性皮疹も出現し, 胸部単純 X 線写真にて両肺野の特に上中肺野に粒網状影を主体とし, 粗大な線状影の混在する像が認められた。金製剤による間質性肺炎 (いわゆる gold lung) と診断された同症例に対し, ^{67}Ga シンチグラフィーおよび ^{201}Tl シンチグラフィーを施行。特に ^{201}Tl シンチグラフィーにおいて, 胸部レントゲン写真上の微細な経時的变化が, RI 集積の明瞭な差として示され, 本症例に対する ^{201}Tl シンチグラフィーの有用性が示唆された。

25. 放射線肺炎における $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DTPA 肺シンチグラフィーの有用性

有吉 功	菅 一能	中西 敬
		(山口大・放)
宇津見博基	山田 典将	(同・放部)

$^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DTPA が静注後速やかに血管外間質に分布する性質を用いて, 広義の放射線肺炎症例 11 例に対して肺シンチグラフィーを試み, その有用性について検討した。

$^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DTPA を静注, 30 分間動画像を収録後, 3 分間の静画像を得た。病変肺野, 正常肺野, 心臓での時間放射能曲線と, 各肺野と心臓の経時的な放射能比を検討したところ, 病変肺野での時間放射能曲線の初期の傾きは緩やかとなり, 肺野/心臓比の曲線のパターンは 3 型に分類しえた。また静画像上の視覚的評価も可能であった。

以上の結果から, $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DTPA 肺シンチグラフィーにより, 放射線肺炎の病態を短時間に評価しうる可能性が示唆された。